英文ライティングにおける誤訳の談話分析

杉 浦 正 好・Anthony G. Ryan

1．はじめに

週刊英和新聞の 1 つである『朝日ウイークリー』で「英文ライティング道場」のコラムを執筆している。中級英語学習者を対象にしており，2006年10月から月 1 回担当して12 年を超えた。朝日新聞社発行誌からの記事の抜粋を英訳する課題とし，投稿された英訳作品の添削と成績を含めた講評を Anthony Ryan 氏（愛知教育大学准教授）と協同で執筆した。両名共通の関心分野である談話分析（discourse analysis）の観点から作品の誤答分析を試みたものである。

連載はその後に少しばかり曲折を経ている。和文英訳の課題が100回を超えた区切りとして，エッセイ・ライティングに移行するように編集部から打診があり，2015年 4 月から新方式に移行した。課題のトピックは編集部に依頼し，投稿作品を募ることで連載を開始した。

ライティングとしてエッセイ・ライティングは理想に近いが，この方式を長期間継続するのに問題が生じた。その 1 つが，投稿者数の激減である。和文英訳の場合は，常に150以上の投稿数であったが，エッセイ・ライティングになったら，50以下になった。もう 1 つの問題は課題のトピックに限りがあることである。和文英訳の課題は『朝日新聞』の記事から選んでおり，限界はほぼ無いといってさしつかえない。ところが，エッセイ・ライティングの課題には限界がある。以上の理由などで，エッセイ・ライティングの方法を見直さざるを得なくなった。

エッセイ・ライティング形式の第 1 回（2015年 4 月）から第12回（2016年 3 月）までは毎月であったが，翌月から和文英訳形式との隔月連載になった。そして第25回（2017年 4 月）からはすべて和文英訳の方式に戻すことになった。一部の読者から惜しまれつつも，エッセイ・ライティングを休止したのである。

理想を追うとすれば，和文英訳を中心に，エッセイ・ライティングをイベントのように随時実施するのも選択肢としてあったが，読者・編集部・講評者に混乱が生じる可能性もあり，当初の和文英訳に戻すことになった。

本稿で対象となる課題は新和文英訳方式の第25回（2017年 4 月）から第42回（2018年 9 月）までの18回分である。論点を明確にするために，原文と投稿された英文は恣意的に加工したものもある。談話分析では文脈（context）が重要視されているが，その視点から和文英訳の誤答分析を試みたものである。

本稿では，前半部分で和文英訳と翻訳との関係について論じ，外国語教育における母語の役割について考察する。後半ではその実践例として，『朝日ウイークリー』連載の「英文ライティング道場」の講評内容を整理して紹介する。講評は Anthony Ryan 氏によるものが中心である。最後に英文ライティングのあり方について検討し，今後の展望と課題に触れながら論を進めたい。

2．和文英訳と翻訳と談話分析

本稿では主として和文英訳という用語を使用しているが，翻訳との違いは何であろうか。日本の英語教育界では翻訳の代わりに和文英訳という用語が一般的に使われている。この 2 つの用語の区別について土屋（2011, p. 12）は次のように述べ

ている。

翻訳（translation）は基本的な言語技術ではないことに注意したい。それは特殊な訓練を必要とする高度な技能であることに注意しなければならない。特に日本語と英語のように語系を異にする言語の場合には，言語と構造と表現形式が非常に異なっているので，英語から日本語，または日本語から英語への直接的変換はほとんど不可能である。

上記の引用に和文英訳（Japanese-English translation）という用語は出てこないが，翻訳（translation）は高度な専門的な技術であり，和文英訳は基礎的な短い日本語文への変換を指すと推察できる。要するに，英語を日本語にする教室での指導技術は和文英訳であることになる。翻訳と和文英訳を区別しながらも，指導技術の1つである和文英訳に対する批判が読み取れる。

当然のことであるが，中学校や高等学校の英語教育では翻訳と和文英訳を同じとは考えていない。英語指導の一環とする場合は，和文英訳であって，翻訳とは一線を画している。その発展形である翻訳は，専門的な技能であって，プロの領域を念頭に置いていると思われる。一般の学校教育では，翻訳技術まで指導するのは想定していない（杉浦，2014, p. 54）。

望月（2010, p, 156）は従来の英作文指導を「逐語訳」が主流であったと断罪し，「自らの発想による自己表現」が理想とする英作文教育であると次のように述べている。

従来の英作文は，1文単位の日本語から英語への逐語訳主流であったが，その時代は終わりを告げ，これからは自らの発想による自己表現が主流になる。

上記の批判は，生徒が内容を把握せずに訳す実態について述べられている。談話分析の視点からいえば，文脈がないがしろにされ，言葉の置き換えになっているのである。英作文が和文英訳になり，「直訳」が横行している実態を憂慮し，英語教育での利用を戒めていると思われる。和文英訳は過去の指導形態とみなされ，学校現場ではふさわしくない指導技術であるとしている。ただし，「自らの発想による自己表現」は理想であって，現実の指導は容易でないことは現場の教員が痛感していることであろう。目指す方向としては正しいかもしれないが，「直訳式の和英変換」から「文脈を考えた和英変換」へ脱却する授業姿勢を具体化することも一案ではないだろうか。

以上は母語を介する授業に批判的な意見であり，その批判の矢面に立っているのが和文英訳であり，日本の英語教育界ではその弊害を頻繁に耳にする。世界の外国語教育では翻訳（translation）という指導技術になるが，同じような批判は枚挙にいとまがない（Kerr, 2014, pp. 2–4）。

一方，その効用を積極的に主張する研究も存在する。馬場（2010, pp. 121–122）は多くの実証研究を基に，和文英訳はライティング能力を向上させる効果があり，指導方法によっては他の言語技能も伸びると指摘している。

文部科学省（2018）は和文英訳についての言及はないが，母語使用に関しては微妙な変化が見られる。

2022（平成34）年4月に施行予定の高等学校学習指導要領が2018年2月14日に公示された。「外国語」を見てみよう（文部科学省，2018）。第1款の「目標」と第2款の「各科目」に続き，第3款には「英語に関する各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」がある。その中に，指導計画の作成に当たっての留意点⑹として以下の記載がある。

⑹生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに，授業を実際のコミュニケーションの場面とするため，授業は英語で行うことを基本とする。その際，生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。

現行の学習指導要領（2013年度より施行）では，「授業は英語で行うことを基本とする。その

際，生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。」とあり，文言はほぼ同じである。

ところが，改訂の学習指導要領では，内容の取扱いに当たっての配慮事項として次のように記載されている。

> 2　内容の取扱いに当たっては，次の事項に配慮するものとする。(1)単に英語を日本語に，又は日本語を英語に置き換えるような指導とならないよう，各科目の内容の(1)に示す言語材料については，意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して指導すること。（下線は筆者による）

現行の学習指導要領では日本語の使用を最小限に留める直接教授法（the direct method of teaching）に近かったが，改訂案では「日本語」という語句が見られ，日本語の使用を多少なりとも容認するようにも理解できる。ただし，直訳を戒め，「意味のある文脈」を意識するように促している。新学習指導要領は母語を排除する方向から，自然な談話を意識した現実的な方向にシフトされているのではないだろうか。

3．外国語教育における母語の有用性

次期の学習指導要領では含みを持たせているようだが，母語の使用は世界の英語教育界ではどのように位置づけられているか見てみよう。母語を排除して英語を教えることに関して，次のような理論的な問題点が挙げられている。

3.1　母語不使用の弊害

近年目覚ましい発達を遂げている認知言語学の知見を探ってみよう。House (2009, p. 63) は言語学習を認知過程とみなし，母語と外国語との関係を次のように述べている。

> If language learning is regarded as a *cognitive process*, it naturally involves mental comparison between the formal and functional characteristics of native and foreign languages. This view is compatible with the already mentioned and long established precept in education: rely on what is already known as a stepping stone to new knowledge.

要するに，言語学習を認知過程の一部とすれば，母語と外国語の形式（文法）や機能を比較するようになるのは当然のことであり，新しい知識（外国語）を学ぶためには既知の内容（母語）に頼る必要があるとの趣旨である。外国語を学習するためには，すでに身についている母語を活用すべきであろう。

さらに，外国語学習における母語の役割について，House (2009, p. 68) は次のように続けている。

> Far from being an obstacle to learning a foreign language, the L1 is a useful resource on which learners can draw to ease their way to a more secure knowledge of and proficiency in the foreign language. The common educational tenet of linking new knowledge with which learners already know can be interpreted in the context of foreign language learning as involving a bilingualization process in which the L1 and translation play an active part.

上記の説明によれば，母語は外国語学習の障害になるどころか，上達を促す有益な手立てであるとしている。さらに，新しい知識と既存の知識を結びつけることは教育的理念の常識である。それは母語と翻訳が果たす役割が大きい「二言語使用過程」を伴う外国語学習においても同様であるとしている。

外国語を母語に頼らずに教えることは確かに効果的ではあるが，母語の使用を厳禁するのには認知学的に無理がある。

母語を排除して教える授業について実務的な側面から見てみよう。学習対象言語（外国語）のみで行う授業について，Cook (2010, p. 155) は著書の巻末で次のように述べている。

> The purpose of this book has been twofold. One aim

has been to show the weakness of exclusively monolingual language teaching—that the reasons behind it are more commercial and political than scientific, that it is supported only by selective evidence and shaky reasoning, and that it disregards leaner and teacher needs. A second aim has been to show that translation has an important role to play in language learning—that it develops both language awareness and use, that it is pedagogically effective and educationally desirable, and that it answers student needs in the contemporary globalized and multicultural world.

要するに，学習対象の言語のみで行う授業は，科学的な根拠がないばかりか，商業主義や政治的な動機によるものであり，学習者や教員のニーズを無視しているとしている。さらに，翻訳により言語認識や言語使用は促され，教育効果があるとし，現在のグローバル化・多文化世界において，学習者のニーズに合っているとしている。

House (2009) と Cook (2010) は外国語教育における母語利用の有用性について述べている。両者の論理が必ずしも日本における和文英訳にそのまま合致するとは限らないが，英語は英語で教えなければならないという論調に釘を刺すものであろう。

3.2　母語を利用したアクティビティ

外国語教育における母語の活用を具体的に進めている学者も登場している。Kerr (2014, pp. 5–8) はその有用性を 6 つにまとめ，その後に母語を使ったアクティビティを提案している。（ちなみに，Kerr は母語を own language としている。）本稿では，その 6 つの有用性から，日本の英語教育に特に関係する 3 つを紹介したい。

⑴　母語は外国語学習の基点（Own language as a point of reference）

母語が旧知識であれば，外国語は新知識である。“New knowledge is constructed on a base of old knowledge.” (p. 5) と述べられているように，すでに熟知している母語を外国語学習の足場がかりとして活用できる。

⑵　新しい技術の有効利用（New technologies）

以前では，翻訳機や翻訳ソフトは機能が貧弱で，使用に耐えられなかった。近年の目覚ましい科学技術の発達によって翻訳機能が充実し，その母語使用を容認せざるを得なくなっている。

⑶　実用性（Practicalities）

抽象的な事象を生徒に説明する場合は母語の使用が効率的である。また，翻訳を使ったコミュニケーション活動も豊富に提案されており，使わない手はない。

以上を参考に，日本の英語教育における母語の有用性をまとめてみたい。和文英訳を上手に利用すれば，⑴母語の知識を活用することができるため，授業が効率的になる。⑵あいまいな理解を減ずることができる。⑶母語と外国語の違いを意識させることができ，異文化理解につながる。⑷学習者の不安感を減ずる。⑸指導方法によってはライティング能力を始め，ほかの言語技能を高める効果が期待できるのである。

次のセクションでは，和文英訳のライティング指導実践例を紹介したい。『朝日ウイークリー』紙連載の「英文ライティング道場」の内容に手を加えたものである。教室における実践例ではないが，和文英訳の再考に少しでも寄与できれば幸いである。

4．添削例

本稿では，第一に，作品における英文の誤り及び問題点を指摘する。日本人が犯しやすい代表的な例を取り上げて分類する。ある程度は直感に頼る方法であり，必ずしも系統的ではないかもしれないが，誤りの傾向は把握できると思われる。次に，それぞれの例の中で，談話分析の観点から誤りを検証する。

各セクションで，原文の日本語の下に提示された英文が検討の対象になる。⇒に挙げた英文は修正文で，その下に修正理由に関するコメントを付してある。注目すべき箇所には下線が引いてある。スラッシュを挟んで語（句）がある場合は，いずれの語も置き換え可能であることを示す。なお, 課題の全文は各例の末尾の枠内に挙げてある。

4.1 比較級

日本人にとって易しいようで難しいのが英語の比較表限である。英語では形容詞や副詞の比較級で表現するが，日本語では文脈に頼ることが多い。英語にするためには比較の対象を可能な限り明示するとよい。

(1)　この夏は暑くなりそうだと予想して，コンビニ各社が早くも「かき氷」に力を入れている。

Forecasting a hot summer, convenience store operators are already focusing on “snow cone” sales.

⇒ Forecasting a hotter than normal summer, convenience store operators are already focusing on “snow cone” sales.

原文は必ずしも比較級で表現されていないが，「例年より暑くなる」という含みがある。夏は暑いということが前提であるので，Anticipating that it will become hotter than usual this coming summer, … や Anticipating that it will be hotter this summer, … のように比較級で表現するのが適切である。比較級を使わずに，Anticipating that it is going to be sweltering hot this summer, … や Expecting that this summer will be unusually hot, … のように，very や really といった強調語，あるいは boiling や extremely hot のような修飾語（句）を使っても類似のニュアンスは伝わる。ほかに，with an eye for a hotter summer this year. のように副詞句を使ってもよい。なお，a hot/long summer のように，季節に形容詞が付く場合は不定冠詞の a が必要である。

【第28回課題】
この夏は暑くなりそうだと予想して，コンビニ各社が早くも「かき氷」に力を入れている。例年よりも前倒しして売り始め，品ぞろえも充実させた。（朝日新聞朝刊2017.4.26）

4.2 類義語

英語は類義語が多い。それぞれニュアンスが微妙に異なるため，それだけ表現が豊かになる。文脈を軽視し，語（句）の置き換えのみに終始すると思わぬ落とし穴がある。類義語には他動詞と自動詞の違いもあり，その使い分けも非母語話者には厄介である。

(1)　英語は3年後には小学3年生から必修化される。

Three years later English will be compulsory from third grade.

⇒ In three years’ time, English will be compulsory from third grade.

原文の趣意は「今から3年後」であることに注意したい。「～年後」には「今から～年後」と「その時から～年後」の2通りの解釈が可能である。英訳する場合は文脈から判断することになる。英語では，… year(s) later と in … year(s) の2つの方法があり，意味が異なる。I met him five years later. で示されるように，later はある時点を基準にしているので，three years later は「それから3年後」となってしまう。in three years や in three years’ time とすれば「現在から3年後」という趣旨に沿う。three years from now としてもよい。

【第29回課題】
小学生の長い夏休みの過ごし方として，英語の学習が注目されています。3年後には小学3年生から必修化されることもあり，早い時期から本場の英語に触れさせたいという親の思いがあるようです。（朝日新聞朝刊一部改訂2017.6.17）

4.3　連語（collocation）と文型

連語について，*Longman Dictionary of Language Teaching and Linguistics* (3rd ed.) によれば，“the way in which words are used together regularly.” とある。要するに，例えば，どの動詞が特定の前置詞や名詞と一緒に高頻度に用いられるかという制限のことである。連語であるかどうかは母語話者の間でも感覚に差があり，必ずしも絶対的なものではない。

(1)　門をくぐると，にぎやかな笑い声が響き，授業に出ていない後ろめたさを感じた。

When he entered the gate, the sound of merry laughter caused him to feel guilt(y) about not showing up for

class.
⇒ When he walked through the gate, the sound of merry laughter caused him to feel guilt(y) about not showing up for class.

類義語としての分類も可能な語（句）である。「門をくぐると」を enter the gate とするのは連語としては苦しい。enter は「(中に）入り込む」というイメージである。昔の豪壮な門はいざ知らず，一般的な「門」には enter は不向きである。ここは On passing through the gate, や When he passed through the gate, のように，walk/go/pass through the gate がよい。なお，When he entered through the gate, や enter the campus/college とするならば可能である。ちなみに，シアトルで，地元の電車がセーフコ・フィールド球場（Safeco Field）の駅に近づくと，Now entering Stadium Station とアナウンスされていた。まさに「駅の構内に入って行く」というイメージである。

【第25回課題】
大学 2 年から授業に出なくなった大学生の男性が約 1 年ぶりに大学へ行った。門をくぐると，にぎやかな笑い声が響き，授業に出ていない後ろめたさを感じた。(朝日新聞朝刊一部改訂2017.2.15)

⑵　長崎市生まれの英国の小説家カズオ・イシグロさんのノーベル文学賞受賞が決定した。
Nagasaki-born British novelist, Kazuo Ishiguro, was decided to be the winner of the Nobel Prize in Literature.
⇒ Nagasaki-born British novelist, Kazuo Ishiguro, was selected to be the winner of the Nobel Prize in Literature.

連語というよりは文型の誤用として分類したほうがよいかもしれない。decide を使用する場合は文型に制限がある。It was decided that the Nobel Prize in Literature would go to Kazuo Ishiguro, a British novelist born in Nagasaki city. のように It is decided that … の構文はよいが，He was decided to visit … といった構文は不可である。

【第33回課題】
長崎市生まれの英国の小説家カズオ・イシグロさん（62）のノーベル文学賞受賞が決定した。10月 5 日夜に，長崎市内のある書店では受賞を祝う看板が掲げられ，著書はさっそく売り切れになった。（朝日新聞朝刊一部改訂2017.10.7）

⑶　働く親たちにとって切実な問題です。
It is a serious problem for their working parents to manage both working and nursing for this period.
⇒ A serious problem for their working parents is to manage both working and nursing during this period.

誤りではないが，あいまいな It を用いた構文「It is a serious problem + 名詞節（句）」は間延びがする。A serious problem is … のようにすると冗長さを避けることができ, コンパクトな英文になる。

【第37回課題】
インフルエンザが大流行しています。子どもがかかると 1 週間近く学校や保育園を休ませなければなりません。この間，仕事と看病をどうやりくりするか。働く親たちにとって切実な問題です。（朝日新聞朝刊2018.2.12）

4.4 副詞の位置

副詞が修飾するのは，動詞・形容詞・副詞・文全体である。文中での位置について厳密な規則はないが，様態を表す副詞の位置について，綿貫・ピーターセン（2011 p. 466）は以下のように記している。

> 動詞の前か後，目的語や補語を伴う場合はその後か，動詞の前に置くのがふつうだが，意味の強調や文の均衡のために文末に置くこともある。（下線は筆者）

文中に動詞が近くに複数ある場合，置く場所によってはどの動詞を修飾するか曖昧になることがある。動詞を修飾する副詞は可能な限りにおいて動詞の前に置くとよい。

⑴　ニホンザルのふんに含まれる物質を分析する

ことで，入浴によるストレス軽減効果を科学的に確認できたという。

By examining the substances included in the monkeys' dung, they confirmed scientifically (that) bathing is effective in decreasing stress.

⇒ By examining the substances included in the monkeys' dung, they scientifically confirmed (that) bathing is effective in decreasing stress.

決して誤りではないが，様態の副詞 scientifically を使って動詞を修飾する場合は，改訂文のように動詞 confirmed の前に置くと修飾関係が明確になる。

【第39回課題】
人と同様に，ニホンザルも温泉でストレスを解消している。そんな研究結果を京都大のグループがまとめた。ニホンザルのふんに含まれる物質を分析することで，入浴によるストレス軽減効果を科学的に確認できたという。（朝日新聞朝刊一部改訂2018.4.4）

⑵　スイス・ジュネーブという欧州の内陸部にいると，刺し身がなかなか食べられない。

If you live in Geneva in Switzerland, an inland city of the European continent, you cannot eat sashimi casually.

⇒ If you live in Geneva in Switzerland, an inland city **on** the European continent, you cannot casually eat sashimi any time you'd like.

副詞 casually は文尾でも誤りではないが，修飾する動詞に近接させたほうがよい。原文の「なかなか」に casually の訳語を当てたのは好判断であるが，この副詞もこれだけでは曖昧である。改訂訳のように情報を加えると意味が明確になる。

【第35回課題】
スイス・ジュネーブという欧州の内陸部にいると，刺し身がなかなか食べられない。おいしい和食レストランもあるが，1万円札より高価な100スイスフラン札がフーッと飛んでいってしまう。（朝日新聞朝刊2017.12.5）

4.5　背景的知識

生活や文化が大きく異なる言語間では，文面だけの訳出では意味が不明になることがある。その際には，背景的知識を活用し，欠けている情報を補う必要がある。

⑴　生育時期だった昨秋に産地が長雨や台風に見舞われた。

During last autumn's growing season, long rainfall(s) and typhoons hit the growing/production/cultivation regions.

⇒ During last autumn's growing season, heavy rainfall(s) and typhoons hit the growing/production/cultivation regions.

long rainfall(s) はもちろんであるが，long rains や a long rain でも立派な訳である。「長雨」は国や地域により，降り方が異なることを認識したい。この内容は日本の昨秋の断続的に降り続く長雨について述べており，long spells/periods of continuous rain/rainfall や prolonged/continuous rainfall が最適である。ほかに，prolonged rain and typhoons，a long spell of rainy weather or a typhoon，a long spell of rainy weather and typhoons，typhoons and a long spell of rain などの表現がふさわしい。

【第36回課題】
鍋料理に欠かせない白菜など，冬の野菜の価格が葉ものを中心に高騰している。生育時期だった昨秋に産地が長雨や台風に見舞われ，生産量が大幅に減っているためだ。（朝日新聞朝刊2018.1.13）

⑵　政府は反転へさまざまな対策を打つ。

The government is trying to take various measures (in order) to reverse the trend.

⇒ The government is taking various measures (in order) to reverse the trend.

英語としては全く問題がないが，当局から苦情が寄せられる可能性がある。trying to … は「（これから）… しようと努力している」という「未着手」の意味である。日本政府は成果は不十分かもしれないが，種々の対策にすでに着手している

と主張するだろう。

【第41回課題】
　出生数が2年連続で100万人を割り，人口減少が続く。政府は反転へさまざまな対策を打つが，家計への不安や保育所の不足もあって，子育て環境の整備にはほど遠い。（朝日新聞朝刊一部改訂2018.6.2）

⑶　私の実家は佐賀市で，ラーメンが1杯500円ぐらいの中華料理屋を営んでいます。
My parents' home is running a Chinese restaurant in Saga city which sells a bowl of Chinese noodle for about 500 yen.
⇒ My parents' home is in Saga city and they are running a Chinese restaurant which sells a bowl of Chinese noodle*s* for about 500 yen.
　『ジーニアス英和辞典（第4版）』（小西・南出，2006, p. 948）によれば，「home は家庭生活の中心となる場所だが，売買される house の意味にも用いる」とある。原文は曖昧であるが，中華料理店を経営しているのは house や home ではないので，「家族」を示す they にしたい。
　また，元の文では関係代名詞 which の先行詞が Saga city になり，佐賀市がラーメンを売っているように理解されてしまう。

【第30回課題】
　私の実家は佐賀市で，ラーメンが1杯500円ぐらいの中華料理屋を営んでいます。裕福な家庭ではないので，両親から学費や寮費が安い国立大なら進学してもいいと言われました。（朝日新聞朝刊一部改訂2017.7.12）

⑷　1990年前後のバブル期，別荘にあこがれたサラリーマンたちが高値で別荘やリゾートマンションを購入した。
During the bubble economy before or after 1990, salarymen, longing for a holiday cottage or a resort condominium, purchased them for high prices.
⇒ During the bubble economy before and after 1990, white-collar workers, longing for a holiday cottage or a resort condominium, purchased them for high prices.
　「バブル期」についての基礎知識が不可欠である。この時期は1990年も含まれるが，or によって1990年がバブル期から除外されることになってしまう。before and after 1990とすれば問題ない。Around 1990, during the period/time of the bubble economy, salaried workers … とするのもよい。
　なお，和製英語が起源である salarymen より，office workers，white-collar workers，salaried workers，company employees などがよい。

【第31回課題】
　1990年前後のバブル期，別荘にあこがれたサラリーマンたちが高値で別荘やリゾートマンションを購入した。あれから30年。お金を払ってでも物件を処分したい人たちがでてきた。（朝日新聞朝刊一部改訂 2017.8.12）

⑸　修学旅行は以前は学年ごとに京都や奈良などを全員で訪れるのが一般的だった。
In the past, it was common (practice) for the entire student body of a particular year to go to Kyoto, Nara or/and the like, on a 'school excursion/trip.'
⇒ In the past, it was common (practice) for the entire student body of a particular grade to go to Kyoto, Nara or/and the like, on a 'school excursion/trip.'
　「学年」は直訳すれば year でもよいが，日本では4月に学年が進行するので，All the students in/from/of the same grade や School trips were generally taken by all the students of the same grade … のように，grade が実情に合っている。

【第32回課題】
　修学旅行は以前は学年ごとに京都や奈良などを全員で訪れるのが一般的だった。だが，最近は学習旅行という呼び名で，希望者がグループごとに訪れる旅行も増えている。（朝日新聞朝刊一部改訂2017.9.15）

4.6　時制

英語の時制には，現在・過去・未来という基本時制のほかに，完了形と進行形との組み合わせがある。文脈を重視する日本語は時制については英語よりは曖昧であるため，誤訳が多い。

⑴　服が売れない時代と言われる一方，高額にもかかわらずジュエリーが注目されている。

While it is said that clothes don't sell well these days, jewelry is attracting much attention despite (its relatively) high(er) price(s).

⇒ While it is said that clothes are not selling well these days, jewelry is attracting much attention despite (its relatively) high(er) price(s).

Clothes don't sell well. でも誤りではないが，現況を如実に述べるためには，Clothes are not selling well. と現在進行形にするとよい。また，Clothes are not sold well. のように受動態にすると，「服が上手に売られていない」という意味になってしまうので不可である。This knife cuts well.「このナイフはよく切れる。」の cut や cook と同じように，動詞の sell は，形は能動態でも意味は受動態として機能する。

【第27回課題】
服が売れない時代と言われる一方，高額にもかかわらずジュエリーが注目されている。服に比べて流行の変化が緩やかで，一つ加えるだけで気分が変わり，資産的な価値もあるからのようだ。（朝日新聞朝刊2017.4.20）

⑵　科学界でドイツの存在感が増している。安定的な研究資金で，レベルの高い論文を出し続けている。

Germany has been wielding a strong presence in the scientific world (of late). Fueled by stable research funds, the country publishes significant papers of high academic standards one after another.

⇒ Germany has been wielding a strong presence in the scientific world (of late). Fueled by stable research funds, the country is publishing significant papers of high academic standards one after another.

原文も「出し続けている」と進行形の意味になっている。現在はもちろんであるが，今後も存在感が続く可能性が高いので進行形がベストである。最初の文が現在完了進行形で訳しているので第 2 文もその時制に合わせる。

【第38回課題】
科学界でドイツの存在感が増している。安定的な研究資金で，レベルの高い論文を出し続けている。政治的意向に左右されず，学問の自由と独立を尊重する気風が根付く。（朝日新聞朝刊2018.3.1）

⑶　大学教育の半分を支える存在となった非常勤教員。

Part-time lecturers have now made up half the teaching staff of colleges and universities and have become one of the main pillars of education.

⇒ Part-time lecturers now make up half the teaching staff of colleges and universities and have become one of the main pillars of education.

原文が新聞でよく見られる連体止めの文章になっているため，文を再構築する必要がある。「大学教育」の意味も曖昧である。「非常勤講師が今や大学教育のスタッフの半分を構成し，教育の主柱になっている」と書き換えて訳す必要がある。現状を述べているので現在完了形よりは現在形が望ましい。

【第40回課題】
大学教育の半分を支える存在となった非常勤教員。増加の背景には，授業のコマ数が多い語学や研究者の少ない分野などで大学側がその力に頼らざるを得ない事情がある。（朝日新聞朝刊2018.5.20）

⑷　政府の増税案に怒った市民が大挙して街頭に繰り出したのだ。

Angered by the government's proposal to raise taxes, citizens took to the streets en masse (in protest).

⇒ Angered by the government's proposal to raise

taxes, citizens had taken to the streets en masse (in protest).

この英文だけならば文法的には問題ないが，下記の課題文を参照すると時系列に混乱が生ずる。前の文には「6月4日」が明示されており，その時点において，反政府デモはすでに始まっているので，時制は過去完了形になる。

【第42回課題】
中東で最も安定した国の一つヨルダンで，5月末から異例の反政府デモが続き，6月4日に首相が辞任するという驚きのニュースが伝わった。政府の増税案に怒った市民が大挙して街頭に繰り出したのだ。（朝日新聞朝刊2018.7.4）

4.7　繰り返しを避ける

英語では同じ語彙や語形を近接して用いることを嫌う。

(1)　受け入れ準備をめぐり，ホテル業界は大わらわ。

Certain hotels have been totally busy making preparations for accommodating guests from afar.

⇒ Certain hotels have been extremely busy making preparations to accommodate the guests from afar.

making と accommodating という「…ing 形」があまりにも近接している。しかも，accommodating は一般的に「親切な」という意味の形容詞であるので preparations to accommodate とする。また，来客は下の枠内にある本文では既出であり，the guests とする。

【第26回課題】
中東の大国サウジアラビアのサルマン国王（King Salman）が3月12日に来日する。同行団は1千人超。受け入れ準備をめぐり，ホテル業界は大わらわ。（朝日新聞朝刊一部改訂2017.3.10）

4.8　話し言葉と書き言葉

話し言葉と書き言葉の混同である。日本語でも話し言葉と書き言葉を区別するが，英語でも同様である。非母語話者にとっては自然な英語に接する機会を増やすしか対策がないようである。

この「英文ライティング道場」の課題の多くは，指示がない限り書き言葉である。

(1)　地震など大きな災害が起きれば，文化や生活習慣が異なる人たちと地元住民が，避難所で一緒に過ごすことになる。

If a big disaster such as an earthquake occurs, local residents will be sharing evacuation centers with international visitors with diverse cultures and lifestyles/living habits (from their own).

⇒ If a major disaster such as an earthquake occurs, local residents will be sharing evacuation centers with international visitors with diverse cultures and lifestyles/living habits (from their own).

big は話し言葉の語彙である。書き言葉としては massive，major，large-scale などが disaster を修飾する形容詞としてふさわしい。書き言葉の連語としてふさわしい他の形容詞は，a major/serious disaster や large-scale disasters などである。a major catastrophe も可である。なお，great は「偉大な」の意味を持つ肯定的な意味合いがあるため，この「災害」にまつわる文脈では好ましくない。

【第34回課題】
世界から日本を訪れる外国人客は，今や年間2千万人を超える。地震など大きな災害が起きれば，文化や生活習慣が異なる人たちと地元住民が，避難所で一緒に過ごすことになる。（朝日新聞朝刊2017.10/30）

5．おわりに

本稿では，最初に和文英訳と翻訳について，次に外国語教育における母語の使用について議論し，後半は中級学習者が投稿した和文英訳作品の誤りについての講評を試みた。

日本の外国語教育，特に英語教育界において，母語の使用をタブー視する論調がある。前半はその風潮に疑問を呈し，母語の果たす役割について述べた。そのまとめとして，Kerr (2014, p. 5) の次の文言を引用したい。

Like it or not, translating won't go away. It makes more sense for a teacher to use translation in a principled, overt way than to pretend that the students are not using it covertly.

要約すれば，「翻訳（母語使用）は決してなくなることはない。無理やりに母語を生徒に使わせるふりをするよりは，母語を一定の原則に基づいて利用すべきである」となる。

後半は母語を媒介とした誤答分析を通じて英語のライティングについて考察を加えた。分類は厳密ではないが，取り上げた英訳作品における顕著な誤りは，背景知識と時制の項目であった。これは談話における文脈 (context) に対する認識が不十分であることに起因すると思われる。原文が曖昧であるため，表面的な文字情報のみでは簡単に理解できない場合があり，言語外の文脈 (extra-linguistic context) に頼ることが求められているのである。

和文英訳では首尾一貫性（coherence）が大きな役割を果たす。換言すれば，言語外の文脈に頼らざるを得ないのである。この首尾一貫性の感覚を補う方策について，山村（1980, p. iv）は，「日本文を英語の構造に，英語的な考え方にほぐしてから，その意味・内容を英語で書くことが重要です」と述べている。日頃から英語のみならず，日本語に対する語感を磨くことが必要であろう。文脈を考えることで語感，ひいては人間の思考力を養うのである。

ライティングの課題を出題するにあたり，反省もないわけではない。課題の原文は日本人読者向けに書かれた記事からの抜粋である。文脈が分かりやすいものを選んだつもりであるが，それでも曖昧であった。逆に，その曖昧さがゆえに文脈と首尾一貫性に対する問題点が浮かび上がった気がする。

最後に，本稿の試みが英語教育における母語使用に関して一石を投じることになれば幸いである。

引用文献

小西友七・南出康世（編）（2006）『ジーニアス英和辞典 第4版』東京：大修館書店

杉浦正好（2014）「英文ライティング指導のための和文英訳」『愛知学院大学文学部研究紀要第』43号：愛知学院大学文学部

土屋澄男（編）（2011）『新編英語科教育法入門』東京：研究社

馬場千秋（2010）「ライティング指導でもとめられているもの」大学英語教育学会監修，木村博是・木村友保・氏木道人編著『リーディングとライティングの理論と実践――英語を主体的に「読む」・「書く」』（「英語教育学体系 第10巻」），東京：大修館書店，pp. 121−122.

文部科学省（2018）「学習指導要領『生きる力』」『文部科学省 Web サイト』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm（2018年9月10日閲覧）

山村三郎（1980）『英語表現の実際』東京：研究社出版

綿貫陽・マーク ピーターセン（2011）『表現のための実践ロイヤル英文法』東京：旺文社

Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.

House, J. (2009). *Translation*. Oxford: Oxford University Press.

Kerr, P. (2014). *Translation and own—language activities*. Cambridge: Cambridge University Press.

Richards, J. C. and Schmidt, R. (2002). *Longman dictionary of language teaching and linguistics* (3rd ed.). Harlow: Pearson Education.